

長野県革新懇ニュース

2014年10月号
(発行日10月10日)
年会費5000円(送料込)
振替 0510-3-15971

185

発行 日本と信州の明日をひらく県民懇話会
(長野県革新懇) 発行人:山口光昭 編集長:高村裕
〒380-8790 長野市県町593 高校教育会館内
TEL:026-234-1231 FAX:026-234-2219 メール:yamaguti@trust.ocn.ne.jp

革新懇の3つの共同目標

- ①日本の経済を国民本位に転換し、暮らしが豊かになる日本をめざします。
- ②日本国憲法を生かし、自由と人権、民主主義が発展する日本をめざします。
- ③日米安保条約をなくし、非核・非同盟・中立の平和な日本をめざします。

先人の生き様が今の憲法に反映している

堀井 正子 さん
(日本文学研究者)



千葉県に生まれ、東京、横浜で育ち、東京教育大学文学部卒業。東京、沖縄、中国をへて、長野市在住。高校教員を勤め、その後、短大や高専、信大等で非常勤講師を勤める。現在、長野県カルチャーセンター、八十二文化財団教養講座の講師等のかたわら、信越放送ラジオ「武田徹のつれづれ散歩道」のレギュラーをとめて24年、信濃毎日新聞の「クレン」の「ことばのしおり」(2001年より、毎月15日、朝刊の2面)、長野市民新聞「レーエッセイ」「だま」の執筆等を担当。主な著書に「ふるさととありがたきかなー女優松井須磨子」「戸隠の絵本」「源氏物語 おんなたちの世界」「ことばのしおり」「ことばのしおり 其の三」など。

更埴・森の杏に憧れ

◇日本文学を志した理由や信州との関わりは?

実は初めからはつきりした決意があったわけではありません。仕事に直結するような分野に進むべきかなあという思いもありましたが、どうしても違和感があり、自分に馴染むのは日本文学だという思いから12月に急遽理系から文系に進路変更し、学部を選びました。東京の白鷗高校で5年間、教壇に立ちましたが、夫の転勤で沖繩へ2年半ほど行っていました。その後信州に来ましたが、非常にいいところなので、両親も呼び寄せ、落ち着くこと

になりました。実は、信州への最初の憧れは、更埴の森の杏だったんです。大学時代、知り合いのご夫婦から最終の上野発の夜行に乗れという指令があつて翌朝森へ行つたんですが、本当に桃源郷であるんだと胸が躍つたことを覚えてます。

とは、信州はなんの繋がりもない、ほとんど未知の土地でしたから、しばらくは県立図書館に足繁く通つて、郷土資料室で地元にかかわりのある小説などを読み、信州の過去から現在を学んでいました。当時、家庭の事情もあり、特に決まった仕事があつたわけではありませんが、求めがあれば対応できるように蓄積をしておこうと考えていました。さまざまな資料を読む中で、信州の先生たちが、特に白樺派の先生たちが、いかに子どもたちに向かい合つていたかを知ることができました。そうした中で「小説探求 信州の教師たち」は書いたものです。

また、製糸の女工についても新しい発見がありました。彼女たちについては、「女工哀史」などの影響もあり、悲惨な働き方が思い起こされるのですが、実は草創期にはむしろ貧しい農家の子女が製糸工場で自ら稼ぎ、新しい道を切り拓いていったという側面もあります。世界遺産になった富岡製糸場には当時、松代の士族の子女が伝習女工として行き、製糸技術を習得して

てきました。松代で操業された「六工社」で技術指導した横田英はその一人で、彼女は「富岡日記」で母への感謝とともに自分で稼いだお金で自分の好きな物を買つたという人生初めての喜びなど、考え方を含め自立していく様子を綴つています。製糸業という工女が連想されますが、実は「工男」もたくさんいて、松代の工男も先端技術を学んで持ち帰り、自力で蒸気機関の「六工社」をつくる礎になりました。

普通の言葉で文学を語る

◇日本文学の魅力は? 改めて日本文学の魅力は何かと尋ねられると答えづらいのですが、信毎の連載や、武田徹さんとの対談の中で心掛けていたのは、普段小説を読む時間がない皆さんに日常の言葉で小説の一端を紹介したいということでした。生活の一部として存在する人の気持ち、社会や歴史のコマを普通の言葉で語りたかと思つてます。言うなれば、文学の世界を日常の糧にすると言つてもよいかもしれません。たとえば源氏物語ですが、千年も前のものですが、今日に通ずるものがあります。光源氏は今というプレイボーイですが、だからこそさまざまな女性と関係を持ち、身分が高いほど行動の自由のない個性豊かな女性たちを登場させられます。千年たつても人間の

心の残った作家は?

特定の作家はいません。学んでいくと、それぞれ大好きになっていきます。ただ、漱石と鴎外は別格で、明治の文豪は巨大な知、桁外れに大きな知の持ち主だったと思えます。木下杢太郎が鴎外を「テエベス百門の大都」と評したことは有名ですが、鴎外にしても漱石にしても漢文を学び、漢詩、漢文を自由に操る、さらに英語、ドイツ語にも精通してました。単に文学だけでなく、自然科学にも深い造詣がありました。さらに当時のイギリスやドイツの異文化、文明の嵐の中で自らどう生きるべきかを根源的に問いつつながら、自分のためだけでなく未来の人々のために何かをすべきという思いを抱いていました。漱石は「私の個人主義」で、お金持ちや権力者ほど他者の自我を押しつづす力を持つ、だから、権力者はそのことを自覚し、自

コラム

木曾の御嶽山は、木曾節にも歌われ、「御嶽」を冠したバス会社、製薬会社等々地域に密着した山である。この御嶽山が噴火し戦後最悪の火山災害となった。火山噴火の予知は難しいと言われているが、「小さな政府」を言い公務員削減をする中、気象庁職員削減、観測所の統廃合と無人化：それがこのような惨事になった背景になつたか検証する必要があると思う。こうしたいましい被害とともに、御嶽山東側の開田高原周辺で農作物にも被害が発生している。一帯には野菜直売所が点在し、トウモロコシ、白菜、小松菜などが並んでいるが、葉物は灰を洗い、外葉を外して売られている。直売所のおばあちゃん「風評被害でお客が来なくなるか心配になる」と不安げな表情で語っている。特産の「御嶽はくさい」は収穫が終わっていない18日に降灰したため、農協には、灰を洗い流し等級を落とす出荷しているという。白菜農家は「洗って出荷するために通常の3〜4倍の時間と労力がかかっている。等級も下がりが経済的負担など今後のことが心配になる」と疲労感を滲ませていた。今後、魚養殖や酪農への影響も心配される。長期的な視野で被害状況を把握し、被害軽減のために多様な支援を続ける必要を強く感じる。

【2面に続く】

【M】